

戦国武将・島左近のお墓



天下分け目の関ヶ原の戦いで奮戦した石田三成の家老・島左近のお墓は京都の立本寺にあります。

「三成に過ぎたるものが二つあり、島の左近と佐和山のお城」と言われるほど高名な武将でした。島左近は最初、大和の筒井城主、筒井順慶に仕えていましたが、順慶が病に倒れた後に筒井家を継いだ順慶の甥の筒井定次とは意見が合わず牢人となりました。その後、豊臣秀長や蒲生氏郷、豊臣秀保など多くの士官の誘いがありました。当時の禄高4万石の石田三成もそのうちの一人でした。ほぼ同時代の加藤清正が肥後熊本にて25万石、福島正則が伊予今治にて10万石を秀吉から貰っていたので三成の所領はいかにも少なかったかが分かります。

それ故、石田三成は所領が少なかったため、関ヶ原では元老の毛利輝元を総大将として諸將を味方につけ、当時、日本一の戦上手とされていた徳川家康と天下分け目の戦に相見えます。石田三成にもきっと家康に勝てるという自信があったのは彼の家老の島左近の存在があったのではないのでしょうか。ある日、秀吉が三成に「そなたを大名に取り立てて後、いかほどの家来を召し抱えたか」と尋ねると三成は「一人で御座います」と答えました。秀吉は「三成、そのひとりの家来は誰か」の問いに三成が口にした人物を聞いて大いに驚いたようです。三成が召し抱えたのは筒井家家人の島左近だったのです。その武力が当時、人々の噂になるほどで三成のような若造に仕えるはずがないと思ったのです。三成は自ら島左近のもとに訪れ、家来になってほしいと言います。しかし島左近は三成のような若輩に使える気はないので婉曲に申し出を断りました。それでも三成はどうしても島左近を自分の家来にしたかったので、家来がだめなら兄になって欲しい、兄がだめなら友になって欲しいと引き下がりません。最終的に三成は自分の4万石の半分を提示し、島左近の首を縦に振らしたの

です。所領の半分を手放してでも島左近を家来にしたかったのは自分が持っている政治的才能と島左近の持っている武力を合わせればどのような難局・難敵にも共に立ち向かえると考えたのでしょうか。

関ヶ原の戦いでは小早川秀秋の東軍への寝返りにより、西軍が不利になる中、島左近は大奮戦し、最後は黒田長政・田中吉政軍に突撃され銃撃により討ち死にされたとされています。島左近の勇猛さ、恐ろしさは尋常ではなかったらしく、特に左近を討ち取った黒田長政軍の兵士たちは関ヶ原から数年過ぎても戦場の悪夢にうなされたそうです。ただし黒田長政軍が島左近を討ち取ったと言われていますが、実際には島左近の遺体は見つかっていないそうです。それどころか関ヶ原合戦後に京都で島左近を目撃したというものが数多いたそうです。それを証明するかのよう島左近の墓が京都市の立本寺というお寺にあります。一般には島左近は関ヶ原合戦後落ち延びて、立本寺の僧として、32年後に死去したとされています。位牌や過去帳も塔頭に残され寛永9年6月26日没などと記されているそうです。現在、古い墓石を新しい石で周りを囲んであります。文字は「妙法院殿島左近源友之大神儀」と読めます。また「土葬」の文字も読めます。



石田三成家老島左近は関ヶ原で討ち死、生き延びて京都立本寺で僧となる、広島へ落ち延び還俗、熊本の西岸寺にて隠棲とかの諸説があります。現在では行方不明者として扱われているようです。

{立本寺}

〒602-8345

京都市上京区七本松通仁和寺街道上る一番町107

電話075-461-6516

総門の前庭と本堂の中庭には見事に咲く桜が観られます



Copyright (C) 2017, Zaicats

島左近の墓所は本堂にはなく、一旦西側に出て道を横切ったところにあります

